■随想

人生の出会い

吉川　治（高18回）

病院は誰のものか？

高等学校卒業後、約四十年が経過し、今は社会保険蒲田総合病院に勤務しています。蒲田といえば町工場の密集する日本の高度成長を底支えしてきた京浜工業地帯です。また、『蒲田行進曲』で有名になったように、映画の撮影所があった町としても知られています。多摩川を隔てて川崎市に接し、東京湾方向には羽田空港から離発着する飛行機が見られる所です。平成九年に大学病院から派遣されて赴任し、地域医療に邁進しています。

着任当初は機械油の匂い（あえて〝臭い〟とは表現しません）のする町でしたが、最近はマンションや駐車場、空地となり、空気の匂いが変わってきました。

私の勤務する社会保険病院は、行政改革の真っ只中にある社会保険庁から運営を委託された、社団法人全国社会保険協会連合会の管理下にある五十二の病院のうちの一つです。平成十五年度より院長として、社会保険病院の経営改善計画にかかわっています。いわゆる、政府管掌保険からの支出に頼らない、自立した病院を目指して努力しています。

今年度より評価制度を取り入れた給与規定を定め、医薬品や医療機器の購入、種々の外注も、民間病院レベルに近づけることによってコストを削減した結果、黒字体質の病院になりつつあります。

病院は誰のものか？　と考えたとき、地域住民の健康増進に貢献すること。つまり、病いを持った方（患者）、かかりつけ医（開業医）、救急隊のために存在する病院にならなければならないと考えています。

「人生は出会いである」と言われますが、ヒトが生まれて死亡するまでに、数々のヒトや物との出会いがあり

●よしかわ・おさむ
社会保険蒲田総合病院院長。東京医科大学派遣助教授。昭和22年、豊丘村生まれ。同48年、東京医科大学卒業後、当大学にて研修、研究。平成9年より副院長として現病院に赴任。専門は内科一般及び血液学。

ます。特に医師は、病いを持ったヒトとの出会いという特殊な出会いを含めて、多くのヒトとの出会いを経験します。私の現在までの出会いを振り返って見ました。

多くの人との出会いの場

出生は、人生スタートの最初の出会いです。

私の祖父は旧制飯田中学（松本中学校飯田支校）の卒業で、喬木村で生まれました。年配の方しか記憶されていないかもしれませんが、戦前、喬木村出身の高登という関取（最高位関脇）がいました。戦後は、大山親方として大関松登を育て、ラジオや初期のテレビ解説を担当していました。その方は、祖父の甥に当たります。

その高登の伝記によると、明治四十一年生まれで、十八歳で大相撲の高砂部屋に入門。昭和八年に最高位の関脇に昇進し、昭和十四年に三十一歳で引退しました。全盛時は身長一八八センチ、体重一二〇キロと、当時としては大型の力士であったと思われます。

学校生活は、多くの人との出会いの場ですが、とりわけ高等学校での出会いが思い出に残っています。特にクラス毎のコンパ、郷友会での出来事、思い出は浪人生活と引き換えにしても、十分価値があったと思っています。

浪人生活も二人の同級生、二年先輩と同じ下宿で一年間過ごし、また学生時代には二年先輩二人と同じアパートで生活し、卒業後もゴルフ、旅行など、公私とも大変お世話になりました。

『戦中派不戦日記』の飯田

私が卒業した東京医科大学は、終戦直前に飯田に疎開したこともあり、大学の先輩からは飯田出身であることで、親しみを持って接していただきました。

当時東京医学専門学校の学生であった山田風太郎（本名山田誠也）は、『戦中派不戦日記』（講談社文庫）に、飯田に疎開していたころのことを書いています。

彼は昭和二十年六月二十五日午前十時十分、中央本線にて新宿駅を出発。午後九時に飯田到着。上郷の天理教会伊那分会、丸山国民学校などで講義を受け、高安病院、飯田病院などで実習を受けたようです。伊那谷、飯田の風景についての記載も多く、「虚空蔵山に霧のような淡い雲が動き、赤石山脈の上に子猫のような白雲が遊んでいるほかは、ただ碧い空。古い塀に蔦がからんで、その中に浮かび上がった薄黄色い柿、丘にそよぐ蕎麦の白い花、茶色な栗。……丘の上から見下ろすと、青い稲と樹と草の中に、飯田の町は愛らしい絵のようだ。」と書かれています。

また、大松座での観劇、仙峡閣、彩雲閣天竜峡ホテル、久保食堂、三楽、東竹、二本松遊郭など、先輩の方々にとっては、昭和二十年代にタイムスリップしてしまいそうな光景が書かれています。

高校の同級生の助けを得て

医師になってからは、内科（血液疾患）と健康診断を専門分野としています。恩師は飯田の先輩で、十数年前、テレビ番組にも出演されて話題となった伊藤健次郎先生です（中43回）。

最近は、芸能人が白血病や悪性リンパ腫であることを公表し、闘病生活に入ることが多くなりました。これも、インフォームド・コンセントの必要性が理解されるようになったことと、これらの疾患の治癒率が著しく改善されたことによるものと思われます。

蒲田に赴任してからは、厚生行政の基本的な流れ、病院機能評価のための意識改革、医薬品開発のための治験、病院の産業医活動などで、高校の同級生に助けてもらっています。

社会保険蒲田総合病院のシンボルマークやステートメントは、新しい社会保険病院になるために、目に見える形として内外に明示できたと考えています。治験、産業医の仕事も気心の知れた同級生だからこそ、円滑に契約も進み、病院の新たな事業となってきています。

これからも、同郷の者がお互いに連絡を取り合い、心地よく仕事ができて、その結果として幾許かの社会貢献が出来ればと考えながら仕事をしています。

『名力士高登』
発行：飯田中日サービスセンター

講談社文庫『戦中派不戦日記』
昭和20年の記録が残る

CIによるシンボルマークと
ステートメント